

学生運動後の時代における自我同一性について

— 作家大崎善生を巡る考察 —

西 本 康 宏

About the ego identity in the age after the student movement

— Consideration over writer Yoshio Osaki —

Yasuhiro NISHIMOTO

【要 旨】 Eriksonは人間の心理社会的な発達における青年期の課題として「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」を挙げ、同時期の人格的活力として「忠誠心」を挙げたが、自我同一性のあり方は社会の変化と共に質的に変化していると考えられる。そこで本研究では、日本の青年に深く関わり社会的にも大きな動きであった学生運動の急激な衰退を取り上げる。当時大学生であった作家大崎善生を、その作品群を通して自我同一性という観点から検討することで、学生運動後の時代における自我同一性のあり方を考察した。結果、学生運動後の時代における自我同一性として、Eriksonの述べる「忠誠心」の向かう先が細分化された事により、自己を社会的に定義するのが難しくなっているのではないかと、その結果として、自我同一性の確立が遅れ、モラトリアムの延長化を引き起こしているのではないかと考えられた。

問題と目的

自我同一性 (identity) とは、Eriksonがその著書「幼児期と社会」の中で初めて発表した、個体発達分化の図式における第五段階、思春期・青年期における発達の危機の一つとして取り上げた概念である。

この個体発達分化の図式において、人間の心理社会的な発達は八つの段階に分けられており、それぞれの段階において発達課題としての心理社会的危機が想定されている。また、この心理社会的危機は、それぞれの時期に個別に用意されたものではなく、それぞれがそれぞれに影響を与え合う関係として考えられている。この事は、たとえ自我同一性にことを限定したとしても、それ以前の四つの危機的段階の解決が自我同一性の確立に深く関与しており、また自我同一性の確立が、その後の三つの危機的段階の解決に左右していることを意味している。

また、Erikson(1964)は、各発達段階における人格的活力 (virtue) というものを想定している。この概念についてEriksonは明確な定義を行っていないが、

しかし「人間が、心理社会的に生きていけるのは、ただこの基本的な活力によって護られており、この活力は、歴史的につながり、かさなり合っている世代の相互交渉の中で発達し、体制化された状況で、共に生きている」と述べている。この人格的活力の概念は、自我同一性や個体発達分化の図式をはじめとするEriksonの他の有名な概念や理論に隠れ、研究数も極端に少ない。しかしそういった中ではあるが、遠藤(1981)はこの人格的活力という概念を「その社会において価値を守る能力」と定義している。

この人格的活力は、Eriksonの想定した八つの各発達段階に対応して、その順番に、「望み」、「意志力」、「目的性」、「競争力」、「忠誠心」、「愛情」、「はぐくみ」、「知慧」の八つが想定されている。

本論文では、主に自我同一性の概念と、同時期に強く関係してくる人格的活力である「忠誠心」を取り上げるが、前述のように、自我同一性も「忠誠心」も、それ単体で存在する概念ではなく、それ以前の発達段階における心理社会的危機に強く影響を受ける。その

ため、まずは概念としてのそれぞれの説明を行う。

個体発達分化の図式において最初の発達の危機 (developmental crisis) として挙げられているのが、乳児期における「基本的信頼対基本的不信」である。この第一の発達の危機は、Erikson (1964) によれば乳児が成しとげる最初の社会的な課題である「母親が見えなくなっても、無闇に心配したり怒ったりしないで、母親の不在を快く受け入れることができるようになること」に挑戦することによって訪れ、この「単に生存を続けることに関連して起る基本的信頼と不信の核心的葛藤を解決するための永続的な様式を確立することが、自我に課せられた最初の仕事」である。そして、「そのような経験の一貫性や、連続性、斉一性が自我同一性の基本的観念を準備する」。

この時期における人格的活力としてEriksonが想定しているのは、「望み (hope)」である。この「望み」を、Erikson (1964) は「求めるものが得られるという確固とした信念である」「望みとは、個人のもつ信仰の基盤であり、これは成人のもつ信仰が生み出すはぐくみによって豊かにされる」と定義している。そして、「望みは、信頼できる母なる人物との最初の出会いにその萌芽を宿す」「望みは、個人の『歴史前』すなわち、言葉や言語記憶より前の諸経験の集積によって生まれる」としている。

二番目の発達の危機は「自律性対恥・疑惑」である。Eriksonはこの時期、子どもの各筋肉が発達してくる事とともに、躰の存在を想定している。鏑 (2002) は、この時期の躰によって自身の要求にブレーキがかけられることが、「思い通りに満たされてきた万能感は傷つけられ、思い通りに要求を満たすことができなくなる」ことであり、「これによって自分の住む世界が一定の秩序をもっていることを理解させようとする。したがって、このコントロールは不安や恐怖・苦痛ではなく、秩序に従うことによって安心感が与えられる方法なのである」としている。心理社会的な側面から見ると、この時期は外からの命令や禁止を幼児自身が内在化していくプロセスであり、フロイトは超自我の形成の基礎と考えている。

この時期に想定されている人格的活力は、「意志力 (will)」である。この「意志力」をErikson (1964) は、「たとえ、幼児期における避け得ざる恥や疑惑の体験をもちつつも、自己統制と同様に、自己の自由な選択の努力をする不断の決意」と定義しており、「意志力は、法と義務とを受けいれる基盤であり、法の精神を

体得した両親の公正な態度にその根をもっている。これが次第に、幼児にとって自己統制の尺度となるものであり、彼は、わがままを自制し、親切心を示し、善意を与えることを学んでいく」と述べている。

第三の発達の危機は、学童期における「自発性対罪悪感」である。この時期の「自発性」に関して、Erikson (1950) は子どもが急速に発達していく期間の途上にあることにも言及し、「躓きや不安に多少つきまとわれながらも危機が解決される。その時、子どもは突然、人格的にも身体的にも『一つにまとまる』ようにみえる」と述べている。また、この時期はFreudのいう男根期でもあり、子どもの、手に入れる・ものにしようとする動きが、「男子の場合には、男根一侵入の様式が強調され続けるが、女子の場合には、奪うということに近い『捕える』という様式に変わり、或は自分を魅惑的にし、可愛い女に見せるというより穏やかな形の『捕える』様式が強調されることもある」としている。この男根期的行動の現われは、そのまま自発性と罪悪感に深く関わっており、罪悪感についてはエディプス・コンプレックスの存在を明示している。

また、幼児の自発性は同時期にある幼児の自発性と衝突する場合が多い。そしてその自発性同士の競争に敗れば自己の力への不信を味わうこととなるが、しかしやりすぎれば処罰されるかもしれない不安を引き起こす。それ故この時期の自発性は十分にその機能を活かしながらも、それによって処罰への不安が喚起される、という側面を持ちうる。このことがこの時期における発達の危機となる。

この時期において考えられている人格的活力は、「目的性 (purpose)」である。この「目的性」を、Erikson (1964) は「幼児性の空想の挫折、罪悪感あるいは罰を受けるかもしれない絶えざる不安などによっても禁止されていない価値ある目的を心に描き、実際に追求する勇気」と定義している。Freudのいう「近親相姦のタブー」に遭遇するこの時期において子供の遊びが中間的現実を提供するものであることに着目し、その上で目的性の性質を「空想によって育てられ、罪の意識によって制限を加えられ、道徳的には制約されているが、倫理的には活発である」とも述べ、また更に「目的性は、次第に、現実性の感覚と結びつくようになる。現実性の感覚とは、達成可能なもの、言葉で分けもつことのできるものと定義することができる」と記述している。つまり、目的性とは、次第に現実的なものとなってくる空想を、実際に追及する勇気と言え

るだろう。

第四の発達の危機は「勤勉性対劣等感」として表される。この時期に関するEriksonの記述をみていくと、「いろいろな物を生産することによって周囲の承認を獲得することを学ぶ」時期であるとしている。Eriksonはこの時期、Freudの言うところの性欲潜在期において、学校生活など社会的な訓練が始まることに着目し、社会の中で自らが役割を果たすことを学ぶ時期としてこの時期を想定している。またこの時期に関してLewin (2002) は、第三の発達の危機と比較し「自発性が自己統制の確立にあるとすると、勤勉性とは他に働きかけ、他を統制し、自己の世界をつくりかえていく『技術獲得』のプロセスである」と述べている。

この「勤勉性」の対概念として設定されている「劣等感」であるが、Eriksonは「自分を不適格者であると感じたり、劣等感を抱いたりすることにある。もし彼が道具や技術に関する自分の能力に絶望したり、同じような道具を使う仲間たちの間における自分の地位に望みを失うと、彼はその仲間や道具の世界の一区分と同一化することさえ断念するかもしれない」と述べている。「勤勉性」が、社会的な学習や技術の習得とそれに対する自らの有能感を意味するのであれば、その対概念である「劣等感」は、技術の習得困難や、それに伴う自らの能力に対する絶望や不信感ということができよう。

この時期に想定されている人格的活力は「競争力 (competence)」である。この「競争力」を、Erikson (1964) は「幼児期的劣等性によって損なわれることなく、課題の完遂にあたって、道具や知能を自由に駆使すること」と定義している。またさらに、「これは、技術を使用する際の他者との協力的参加の基礎となる」とも述べている。

第五の発達の危機として想定されているものは、「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」であり、さらにこの時期の人格的活力は「忠誠心 (fidelity)」である。これに関しては、本論文の中核となるため、細かくみていくこととする。

谷 (2008) は自我同一性に関するEriksonの記述を整理し、自我同一性について次の三つを定義としている。一つ目は「自我同一性の感覚とは、自分自身の斉一性・連続性と、他者に対しての自分が持つ意味の斉一性・連続性が一致するという感覚」であること、二つ目は「自我同一性の感覚には、自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあると

いう感覚、すなわち、心理社会的同一性の感覚が含まれる」ということ、三つ目は「自我同一性の統合が行われるのは、青年期である」というものである。Lewin (2002) によれば斉一性の感覚とは、自分が他者と多くのものを共有しながらも他者の特徴の中に自分が埋没してしまわない何かを自分の中にもち、それを経験的に確信していることである。また連続性の感覚は、幼児期から自分が重要な人々とどのような関わりの中に成長してきたかを、自分なりに納得いく形でわかっていることを指す。

以上の事から、自我同一性の概念とは、自己と他者がかつ斉一性・連続性が一致することと、心理社会的同一性の感覚を持つことの二つの柱によって支えられており、またそれは早くとも青年期以降に確立されるものであると言える。

またこの時期における人格的活力は「忠誠心」である。この「忠誠心」をErikson (1964) は、「避け得ざる価値体系の矛盾にもかかわらず、自ら自由に選んだものに忠誠を尽くす能力」と定義している。また、「これこそ、同一性の礎石であり、堅固なイデオロギーや信頼に足る友がらはその源泉である」とも述べている。

この忠誠心について、Eriksonはその二面性を指摘しており「人種的・国家的・階級的同一性は、他者を自分に反目する存在であるとみなすようにしむけ、極端な人にあっては、他者を敵として、過度に問題視し、動物世界にも見られない残忍さを発揮して、その敵を処理することすらある」として、人格的活力である「忠誠心」が、時に倫理的な問題をはらむ可能性があることを示唆している。そうした上で、「青年に忠誠を尽くす内容を与え、他を拒否し、価値ある対象を求めさせるのは、成人の仕事である」と述べている。

ここまでで、Eriksonの個体発達分化の図式における第五の発達の危機まで、そして各段階における人格的活力について振り返った。Eriksonの個体発達分化の図式に代表される漸成的発達理論において、人間は社会と相互に影響しあう存在であり、社会的な影響を必ず受ける存在である。特に、第V段階において問われる自我同一性は、「自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつある感覚」が定義に含まれており、社会的な影響を大きく受けることが予想される。

社会の変化と共に自我同一性のあり方が質的に変化することは、小此木 (1978) をはじめ多くの研究者が

指摘しており、無藤（1999）は様々な価値観の多様化によって自己の社会的な役割が曖昧になってきている事を述べ、また「葛藤し自己探求する基盤としての『自分というもの』が希薄になってきている」としている。

この「葛藤し自己探求する」というのは、Eriksonの想定したモラトリアムの期間において行われる作業である。このモラトリアムとは、元々は支払猶予期間を表す経済用語である。Eriksonはこの言葉を用い青年期を特徴的に表しており、「その猶予期間は種々の『冒険』のために、あるいは『異なる』あり方を自ら実験する（ことを推奨される）延長期間として与えられるもの」（Erikson, 1977）と説明している。小此木（1978）によれば、その期間は日本においては「古くそれは徒弟奉公期間であり、近く現代社会では、大学生活がその代表的なものである」が、現在のモラトリアム期間は「今や三十歳くらいにまで延長・遷延している」と述べている。

日本においてこのような自我同一性に関して多くの研究が行われるようになったのは、鑑（1995）によれば1970年以降の事であり、特に1975年以降は、研究数は急速に増えている。また、1978年に刊行された「モラトリアム人間の時代」が、社会的に広く反響を呼んだことから、この時にはすでに研究者の間だけでなく、広く社会的に、モラトリアム期の変化がそれとなく認識されていたことを示している。

この1970年代において青年期に深く関わり、そして社会的にも大きな動きであったものとして、学生運動の急速な衰退が挙げられる。それまで、ひとつの大きな価値体系として存在していた学生運動が急速な衰退をみせたことは、当時の青年にとって多大な影響を与えたであろうことは容易に予測される。

そこで本論文では、学生運動の歴史を概観し、そういった社会の流れの後にどのような影響が青年に及んでいたのかを、1970年代において青年であった作家、大崎善生の自我同一性を検討することにより、考察していくことを目的とする。

方法

学生運動に関する文献から、学生運動の歴史について概観する。その上で、作家大崎善生の長編・短編・エッセイなどから大崎善生の自我同一性について考察する。

対象として大崎善生を選んだ理由として、1976年頃

早稲田大学に在籍していること、その作品の多くにおいて大学時代をテーマとして描いており作品数として不足のないこと、作中において学生運動に深く触れていること、その半生をEriksonの漸成発達理論から見た場合、特徴的な青年期を過ごしているように思われることが挙げられる。

結果

学生運動の始まりは、れんだいこ（2009）によれば、戦後直後の、「大学の自治」を尊重する流れの中から始まる。「学生に対する民主的且つ社会性の育成」「学生生活の向上や課外活動の充実を図る」大学教育の一環として、学生全員に自治会に加入させ、自治会費を徴収し、その運営につき学生に自主的運営に任ずという形で、学生運動は始まっている。また、このような始まりを見せた学生運動を、れんだいこは大きく十の期間に質的に分類している。

第一期は、1945年8月15日から1949年末までで、この時期を「全学連結成とその発展」と名付けており、学生運動が戦後革命の随伴運動として勃興し運動していった時期としている。また、1948年9月18日、初代委員長武井昭夫が選出され、全日本学生自治会総連合、略称「全学連」が結成される。

第二期は、1950年から1953年末までの期間であり、さらにその期間を二分し、1950年を「共産党の50年分裂、国際派に従う全学連」、1951年から1953年までの時期を「50年分裂期の二次的學生運動」と命名している。

前者は、1950年初頭に発表されたスターリン論評に対して、日本共産党内部で意見が二つに割れた時期を指している。スターリン論評の主旨に異議を唱える所感派と、批判を無条件に容認するべきだとする国際派の二派に日本共産党は内部分裂を起し、全学連主流派は国際派の方を支持している。また、朝鮮戦争勃発による日本でのレッドパージ運動等が起り、全学連は緊急中央執行委員会を開き「レッドパージ反対闘争」を決議、各大学自治体に指示を発している。

1951年からの「50年分裂期の二次的學生運動」の期間においては、日本共産党が武装闘争を訴えたのに対し全学連主流派がそれに応えず、反主流派のみが武装闘争に参加したようである。しかしその後、所感派学生党員が武井系執行部を追放し主導権を握り、学生運動自体も武装闘争の方向へと流れていく。

第三期は1954年から1955年までで、「6全協の衝撃、全学連の崩壊」と命名されている。この時期において、

所感派とそれを支持する学生の武装闘争は行き詰まり、その反動として、全学連第七回大会では没政治主義方針が確立された。全学連第七回中央委員会では「学生運動は、学生の本分に基づく身近な要求を取り上げて、それをサービスしていくべきである」という「自治会＝サービス機関論」が唱えられている。

第四期は、その中で二つの期間に分けられ、前者は1956年から1957年末までの期間である。この期間は「反日共系全学連の登場」と命名されている。全学連第八回中央委員会では、先的全学連第七回中央委員会での「自治会＝サービス機関論」を批判し、「闘う全学連再建」の基礎を作った。その後、様々な活動を日本共産党とは独自に組織していくようになる。対して、日本共産党の指導下で青年運動を行おうとした学生が、日本民主青年同盟、略称「民青同」を結成している。

第四期後期は1957年であり、「革共同の登場」と名づけられている。この時期新しい勢力として、日本革命的共産主義者同盟、略称「革共同」が誕生する。革共同は全学連の掌握に向かったが全学連は革共同と合流せず、その結果、学生運動では日共、革共同、全学連という三派が活動するようになる。

第五期は三つの期間に分けられ、第五期一期は1958年であり、「ブントの登場」と命名されている。この時期全学連の推進体となっていた日本反戦学生同盟は、名称を日本社会主義学生同盟、略称「社会学」と変えた。また、全学連主流派の人間が共産主義者同盟、別称「ブント」を結成した。

第五期二期は、1959年であり、「新左翼系全学連の発展」と名付けられている。全学連第十四回大会において、ブントは全学連中央執行部の過半数を獲得、60年安保闘争に突入していく。60年安保闘争に関しては、「安保条約改定阻止国民会議」「安保改定阻止青年学生共闘会議」が結成され、これらによる統一行動では、国会構内に突入して抗議集会を行うなどの行動がとられた。

第五期三期は1960年であり、「60年安保闘争・ブント系全学連の満展開」と名付けられている。この時期、全学連は羽田空港ロビーにて座り込みを行ったり、国会解散を要求しての国会包囲デモ、首相官邸への突入が行われた。

第六期は四つの期間に分けられ、第六期一期は1960年後半である。この時期は、「安保闘争総括を廻るブントの大混乱」と命名されている。全学連第十六回大会において、民青同系の都自連に、全学連主流派の学

生が解散要求を行うなどしたため、民青同系の学生が全学連を離れ、独自の全学連組織である全国学生自治会連絡会議、略称「全自連」を結成。主流派であるブントに関しても、60年安保闘争の結果に対しての意見の相違から「革命の通達派(革通派)」「戦旗派」「プロレタリア通信派(プロ通派)」の三派に分裂する。またこの時期、社会党の青年運動組織として、社会主義青年同盟、略称「社青同」が結成されている。

第六期二期は1961年であり、「マル学同全学連の確立」と名付けられている。ブント戦旗派は組織を解散させ、革共同全国委員会に合同、ブント革通派は解散、ブントプロ通派も戦旗派に遅れて解散し、多くが革共同全国委に合流している。しかし関西方面のブントは分裂せずに独自に活動を始めた。このようなブントの分裂の中で、マルクス主義学生同盟、略称「マル学同」が全学連主流派となる。

このマル学同下の全学連に対して、民青同系全自連が、全学連大会への参加条件として、平等無条件参加、権利停止処分の撤回、大会の民主的運営の三つを決議した。またブント再建派社会学同と革共同関西派、社青同は反マル学同で意見を一致させ、飯田橋のつるや旅館で対策を講じた。これをつるや連合と呼ぶが、この動きに対してマル学同は、全自連に対しては自治会費未納を理由に全学連から排除、つるや連合に対しては代議士の数を減らすことで対応しようとしたが、つるや連合は反発、早朝から会場を占拠する行動に出た。しかし、マル学同は角材を調達してつるや連合を武装襲撃した。これが、学生運動史上内部抗争において初めて武器が登場した時となる。このような分裂の時期にあって、学生運動の統一を目指す学生が、青年学生運動革新会議略称「青学革新会議」を結成する。

第六期三期は1962年、1963年の二年であり、「全学連の三方向分裂固定化」と名付けられている。関西ブントは「関西共産主義者同盟」を結成、また民青同系の学生が「東京学生平民共闘」を発足させる。ブント再建派、社青同、構造改革派の三派が連合して全国自治会代表者会議を開催するも意見が食い違い、ブント再建派が武装部隊を会場に導入するなどして分解する。また革共同全国委も、中核派と革命的マルクス主義派(革マル派)に分裂している。このようにして、全学連は、革マル系、民青同系、三派連合系、中核派の、大きく分けて四つに分裂することになる。

第六期四期は、1964年であり、「新三派同盟結成・民青同系全学連の登場」と命名されている。三月に、

ブント独立社学同、社青同、中核派が全国学生自治会代表者会議を開催、新三派連合が確立した。そしてこの年の七月、学生運動史初の内部ゲバルトとなる「七・二事件」が発生している。

十月には民青同系「安保反対、平和と民主主義を守る全国学生連絡会議（平民学連）」が全国自治体代表者会議を開催、二月に民青同系全学連が再建される。

第七期は二つの期間に分けられ、第七期一期は1965年と1966年である。この時期は「全学連の転回点到達」と名付けられている。この時期、各大学での学生運動が活発化し、更には二分裂していたブント再建派が六年ぶりに組織統一をみる。十二月には、新三派連合が全学連再建大会を開き、三派系全学連を結成する。こうして、革マル派系、民青同系、新三派系の三つの全学連が誕生した。

第七期二期は1967年であり、「激動の7ヶ月」と命名されている。中国の文化大革命の本格化やベトナム戦争の泥沼化といった国際状況を背景にして、立て続けに街頭実力闘争が起きている。

第八期は二つの期間に分けられ、第八期一期は1968年となり、「全共闘運動の盛り上がり」と命名されている。「佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争」においては、ブント系学生が外務省に乱入し八十九名が逮捕され、また機動隊と再三の衝突を起こしている。「王子野戦病院設置阻止闘争」では、学生千人が病院に突入、また米軍基地内に学生が突入する事態も生じ、各地で機動隊との衝突が起こっている。しかしそういった流れの中にあっても、六月に開かれた「アメリカにベトナム戦争の即時全面中止を要求する6・15集会」では中核派對革マル派・社青同解放派連合という構図で乱闘が起きている。また同じく、一度統一されたブントも、前衛派と怒濤派に分裂している。

第八期二期は1969年であり、「東大闘争クライマックス・全国全共闘結成」と名付けられている。一月には東大全共闘が安田講堂封鎖を強化し籠城、八千五百名の機動隊が導入され、二日間にわたって衝突が起きた。九月には「全国全共闘会議」が結成されたが、結集した各派セクトが自派の勢力拡大と浸透を優先させたこと、各主要党派間での内部ゲバルトの激化等の理由により、年内のうちに解散している。

第九期は三つの期間に分けられ、第九期一期は1970年である。この期間は「70年安保闘争とその後」と名付けられている。この年赤軍派による「日航機よど号ハイジャック事件」が発生しているが、学生運動の全

体的な動きとしては大きな事件は発生していない。70年安保に関しては60年安保闘争の時に見られたような行動は行われず「そしてゲバルトだけが残った」と評されている。またこの時以降、一般学生の急速な政治的無関心化が進行していったようである。

第九期二期は1971年から1975年までで、「70年代前半期の学生運動」と命名されている。70年安保以降のこの時期、党派間ゲバルトや、党派内での内部ゲバルトが多発している。1972年には「あさま山荘事件」が、また新日和見主義事件と呼ばれる肅清事件が起き、内外へと先鋭化や過激化を強めていっている。

第九期三期は1976年から1979年までで、「70年代後半期の学生運動」と名付けられている。この時期において、中核派對革マル派、社青同解放派對革マル派の党派抗争は更にすさまじくなり、1977年、社青同解放派の指導者が殺されている。

第十期は1980年から現代までで三つの時期に分けられ、それぞれ「80年代の学生運動」「90年代の学生運動」「2000年代の学生運動」と名付けられている。しかし、れんだいこは、「これ以降は、次第に運動の低迷と四分五裂化を追って行くだけの非生産的な流れしか見当たらない」としている。このことを加味して考えても、学生運動自体の波は、70年安保を期に急速に引いて行ったと言えるだろう。以上、かなり駆け足ではあるが、学生運動の興隆と衰退の歴史となる。

学生運動が急速に衰退していく原因のひとつが、内部ゲバルト、略称「内ゲバ」と呼ばれるものである。蔵田(2003)によれば1970年代から急激に増加しており、過激化していった内部ゲバルトに対応して、周囲の一般学生の急速な無関心層化が進んでいったのは、れんだいこ(2002)の指摘する通りである。

以上から、学生運動が衰退した時期は、1970年代中盤からであろうと推測される。そして、そのような1970年代中盤において早稲田大学に入学したのが、作家の大崎善生である。

大崎善生は1957年、北海道札幌市において、大学病院に医者として勤める父のもと、次男として誕生した。父は、エッセイ中で「大らかで優しい」と書かれると共に、作中では厳格な存在として描かれることも多く、息子あるいは娘の上京に反対する姿が多く登場する。母は優しい存在として描かれることが多く、上京した主人公を気遣う姿が見られる。三歳年上の兄は父の薦めに従い、医学部に進学したようである。作中では「死んだ長子を追いかけて上京する主人公」といった

モチーフも多く出てくる。

幼い時期から小説家となる夢を持っていた大崎は、この札幌時代において、計画的な読書を行うことで自らを訓練しようとしている。そしてこの訓練は、大学時代に味わうこととなる、小説を書かれないという挫折体験の前まで、約十年に渡って行われた。

この「自己を訓練するために計画的な読書を十年間も続ける」という行動を考える際に、人格的活力の「競争力」と「忠誠心」の両者が理解の助けとなるように思われる。自らを自由に駆使して技術を習得しようとする時期であれば、大崎がとった自らを訓練する行動自体は不思議なものではない。また、大崎が札幌市に住んでいた頃、隣家に小説家である原田康子が住んでおり、「競争力」の表れとしての訓練が、小説家という職業の具体的なイメージを帯び、予定的な自我同一性を準備していったと考えられる。

このように小説家になる夢を持つ大崎は、進学先に関して父と対立することになり、父の反対を押し切る形で1976年、早稲田大学に進学する。

この頃の学生運動をみる大崎の記述から、大崎が学生運動をその「忠誠心」の向く先として選ばなかった事が分かる。しかし大崎は周囲の無関心層的な価値観を選んだわけでもなかったようだ。この当時大崎は東京にて社会的に孤立しており、その原因として、新しい土地での人間関係の難しさと、大学に対してのイメージと現実のギャップの二つが挙げられる。

そうした社会的孤立の中で大崎は将棋に出会い、それに深くのめりこんでいく。この「何かにのめりこんでいく」主人公の姿は多くの作品で描かれており、そこに共通するのは、自らがのめりこむものに対して、「答えのないものを考え続けるということは、まさしく哲学と同じ作業ではないか」といった考えを持つことであり、この哲学との類似は、自らが小説を書く事に対しても同じく述べられている。このことから、答えのないものを考え続けるという点において、将棋と小説を書くという事の類似性があったことがわかる。

大崎の将棋へののめりこみ方は激しく、毎日深夜まで、将棋会館で将棋を指し続ける生活を続け、約一年間でアマチュア4級からアマチュア四段まで昇格するほどであったようだ。小説を書くことをその「競争力」から学び、隣家に住んでいた原田康子の存在も受けて「忠誠心」の行き先となり、大学への失望から強固なものとなったそれが、哲学的であるという親和性から将棋に流れていっている様が、ここから読み取ることが

できる。しかし、そういった大崎の動きに反して、将棋の世界では大崎を社会的に定義するのは困難だった。

プロ棋士の養成機関である新進棋士奨励会には年齢制限があり、受験資格の年齢制限は十九歳以下に設定されている。この当時、二十一歳であった大崎がプロ棋士を目指すのは制度上不可能であったようだ。このことについては大崎自身も承知していたようである。将棋に深くはまりこんでいくうちに、当時付き合っていた女性と別れる事件もあり、ある日、大崎は自らが社会的に完全に孤立してしまっていることに気付く。

また、この時期に、大崎はもう一方の「忠誠心」の行き先であった小説に関して、小説が書けない、という大きな挫折体験を味わっていることも、重要な点となる。

そういった挫折体験や、社会的な孤立に対しての気付きが重なり、二十四歳の時大崎は、自らのアパートの部屋にとじこもるようになる。部屋の中で布団をかぶって過ごし、誰にも会わない生活を続けたようである。この引きこもりの時期は、数カ月にわたって行われている。

この時期に大崎が考えていたひとつのテーマとして、「傘の自由化は可能か」というものがある。このテーマについては自らで「夢のようなこと」と評しつつも、しかし同時に「せめてもの社会への抵抗の言葉だったのかもしれない」と述べている。注目すべきは、このテーマの方向性が社会に大きく向いていることであり、また、それを「社会への抵抗」と大崎自身が理解していることである。こういったテーマの方向性や記述から、この社会的に孤立した時期において、あるいはそういった時期だったからこそ、強く自己の社会的な定義を求めていることがうかがえるだろう。

引きこもりの時期から脱した大崎は、結果として将棋の世界によって社会的に定義されるようになる。将棋会館に通い続ける大崎に、将棋の手合い係の声が掛かり、そこを経て大崎は将棋雑誌の編集に携わるようになる。大崎が自らの半生を振り返る機会になったのは、二十年振りにかかってきた元恋人からの電話であり、その体験は初のフィクション作品である「パイロットフィッシュ」の始まりとして描かれている。

その後、本格的に作家として活動するために退職、幼少期からの夢であった作家として活動し、精力的に作品を発表していくようになる。

以上が、現在までの大崎善生の半生となる。

考 察

大崎の自我同一性を考えるに、鍵概念となるのは「忠誠心」であろうと思われる。小説家になる夢を持ち、それを目指すために行ったのは、小説家になるための読書であった。それは「競争力」を契機とし、自らの中に小説家としての予定的な自我同一性を作り上げていく過程での、発現としては早期な「忠誠心」の表れであるように考えられる。自ら選んだものに忠誠を尽くす、また、それは極端な形として表れ得るという「忠誠心」の性質を考えた時に、技術を習得する喜びに重きを置いた「競争力」だけでは理解困難なこの訓練も、理解しやすいものとなる。

大崎の「忠誠心」の行き先を考えてみると、はじめ「忠誠心」は「小説を書く」という方向へ向いている。そしてそのために、父親の反対を押し切る形で上京することになり、上京した後は、その「忠誠心」は将棋へと向かうことになる。将棋にはまりこんでいくうちに、完全に社会的孤立への道を歩んでいくこととなるが、その際に将棋の世界は大崎を社会的に定義することができなかった。同時にこの時期に小説家を目指すうえでの挫折体験を味わい、その結果として、苦しいモラトリアムの時期に突入することになる。結果として大崎を社会的に定義したのは将棋の世界であったが、そこに至るまでに、大崎は部屋に閉じこもることを選択する時期があった。自己の社会的な定義は自我同一性を支えるひとつの大きな要因であり、これを欠いて自我同一性を確立することは極めて困難である。

ここで見えてくるのが、自己を社会的に定義することの困難さである。学生運動の大きな流れ、というものはある意味では自己を社会的に定義することが極めて容易になる流れであったように思われる。

しかし、大崎が大学に入学した1976年は、学生運動が衰退の一途を辿っている時期であり、もはや学生運動に社会的な自己定義を求めるのが困難であったようである。社会的な定義のみならず、「忠誠心」の向かう先には、友がらを得る役割想定されており、その面においても大崎が社会的な孤立から部屋に閉じこもるにいたった動きは注目し値するだろう。

以上から、学生運動後の自我同一性について考えられることをいくつかまとめると、一つは、自己を社会的に定義することが困難になっていることである。

学生運動というひとつの大きなイデオロギーは、ある意味では自己を容易に社会的に定義することができるものであった。そこには、「忠誠心」の働きもあり、

自己が所属する組織に名前を付け、敵を想定し、集団で立ち向かい、時に類似した組織と共に歩むという、明確で大きな動きというものが見られた。しかし、学生運動という大きな価値体系が失われ、無関心層が主流になるにつれて、明確で大きな動きを見出すことが困難になっているように思われる。そういった中で自己を社会的に定義することが困難になっているのではないだろうか。つまり、「忠誠心」の向かう先を見つけにくく、そしてその向かう先は細分化されていき、そのことが友がらを得ることの困難さに繋がっていくのではないだろうか。

また細分化されていった結果として、大崎善生のように「忠誠心」の向かった先がその機能を十分に発揮し得ない場合も考えられる。Erikson (1964) は「忠誠心」の対象となる価値体系の役割について「青年に、そのトーテムのメンバーとしてあるいは種族、信仰、国家、階級などの超家族集団のメンバーとして、いろいろの儀礼や堅めの式などの中に、真実があることを伝える」「青年は、支えてくれる成人と、確信のもち得る仲間を必要とする」と述べている。しかし、細分化された価値体系においては、大崎の場合にあったように、支えてくれる仲間を持ち得なかったり、本人を社会的に定義する力を持たなかったりする場合も十分に考え得る。その結果として、自我同一性の確立が大幅に遅れ、モラトリアムの期間の延長をもたらしているのではないだろうか。

学生運動後の、大きな価値体系が喪失したこの時期において、自我同一性をめぐる動きとしては、以上のようなものが考えられる。学生運動の流れの衰退により、自我同一性を得て邁進していった時代が終わったのが1970年代後半であり、当時20歳前後であった学生は現在50歳代となる。自我同一性の確立が難しかったであろうこの時期に青年期を過ごした世代の影響は確実に次の世代にも出ているであろう事が予測され、今研究の結果を踏まえ、そういった側面に対する研究もなされる事が期待される。

しかし、今研究においてそういった結論を導き出せる一方で、問題点がいくつか存在する。一つは、一人の作家の自我同一性を考察する方法であるために、他の時代との比較ができなかったことである。

学生運動の全盛期において青年期を過ごした人物を対象に研究が行われることによって、より正確な、学生運動後の自我同一性に関しての比較が行うことができると考えられる。本研究はそのひとつの礎石として、

学生運動後の時代における自我同一性のあり方を考察しており、引き続き研究が行われることが望まれるだろう。

引用文献

- Erikson, E. H. (1950). *CHILDHOOD AND SOCIETY*. W. W. Norton & Company, Inc.
 (エリクソンE. H. 仁科弥生(訳) (1977). 幼児期と社会 I みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *IDENTITY AND THE LIFE CYCLE*. International Universities Press, Inc.
 (エリクソンE. H. 小此木啓吾(訳) (1973). 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and Responsibility*. W. W. Norton & Company, Inc.
 (エリクソンE. H. 鏑幹八郎(訳) (1971). 洞察と責任 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1977). *TOYS AND REASONS Stage in the Ritualization in Experience*. W. W. Norton & Company, Inc.
 (エリクソンE. H. 近藤邦夫(訳) (1981). 玩具と理性 経験の儀式化の諸段階 みすず書房)
- 遠藤辰夫(編) (1981). *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版
- いいだもも・蔵田計成(編著) (2003). *検証内ゲバ*

〔PART 2〕 社会批評社

- 大崎善生 (2001). *パイロットフィッシュ* 角川書店
- 大崎善生 (2001). *将棋の子* 講談社
- 大崎善生 (2003). *ロックンロール* マガジンハウス
- 大崎善生 (2004). *別れの後の静かな午後* 中央公論新社
- 大崎善生 (2005). *ドイツイエロー、もしくはある広場の記憶* 新潮社
- 大崎善生 (2006). *傘の自由化は可能か* 角川書店
- 大崎善生 (2006). *九月の四分の一* 新潮社
- 大崎善生 (2006). *タペストリーホワイト* 文藝春秋
- 大崎善生 (2009). *ディスクスの飼い方* 幻冬舎
- 小此木啓吾 (1978). *モラトリアム人間の時代* 中央公論社
- れんだいこ (2009). *検証学生運動 — 戦後史の中の学生反乱* 社会批評社
- 谷 冬彦 (2008). *自我同一性の人格発達心理学* ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本裕子 (1995). *アイデンティティ研究の展望II* ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・宮下一博・岡本裕子 (1999). *アイデンティティ研究の展望V—2* ナカニシヤ出版
- 鏑幹八郎・山下 格(編著) (1999). *アイデンティティ* 日本評論社
- 鏑幹八郎 (2002). *アイデンティティとライフサイクル論* ナカニシヤ出版